

## 「生きものの人・共生の里」を考える会議開催結果（要旨）

## 1 4市長の報告

周南市長（河村和登氏）：

渡来数回復の取組として、世界初の試みである傷病ツルの移送を実施した。市内八代地区の施設で保護管理するが、夏場の飼育や放鳥方法、放鳥後の追跡調査、専門家の配置等が課題だ。官民一体となった取組が重要である。

持続可能なツルの渡来地を目指して、「ツルと人・共生の里」再生構想を策定しており、コンビナートとナベツルが共生する環境都市を目標としている。

佐渡市長（高野宏一郎氏）：

野生トキ復帰実行計画を定め、集落座談会などの開催により市民の理解を深めること、水田ビオトープ作りなど生息環境・エサ場環境の再生、トキを軸とした地域振興を実施している。佐渡は、人と生きものが共生できる島づくりに取り組んでいく。

豊岡市長（中貝宗治氏）：

豊岡は低湿地地域で、コウノトリの餌となる生物が豊富であったことが、コウノトリ生息の背景にある。

野生化には3つの目的があり、一つ目はコウノトリとの約束（かつて捕まえたとき、いつかは増やして放すとの約束を果たすこと）、二つ目は野生生物への保護への世界的な貢献、三つ目はコウノトリも住める豊かな環境の創造（あんな鳥もいてもいいよねというおらかな文化を育てていくこと）である。

（豊岡市の主な取組）

県立コウノトリの里公園、合鴨農法（8.5ha）、ビオトープ水田（17ha：54千円/10a補助）、冬期湛水水田・中干しの延期（29a 40千円/ha補助）、水田魚道（88箇所補助あり）、自然再生計画（堤外湿地を200haにする）、たんぼの学校（ビオトープ水田で実施）など

出水市長（渋谷俊彦氏）：

約100haの保護区があり、最大12000羽のツル類が渡来する。周南市の取組には今後できる限り協力したい。移送した3羽のツルが元気で安心した。

出水市はこれまでツルと共存共栄してきた。地元の中学校のツルクラブの羽数調査などは親子二代でやっている例もある。ツルに関しては、観光資源としても力を入れたい。

ナベツルの一極集中をどのように解決するか、分散化の話も出ている。

## 2 基調報告：中村玲子（ラムサールセンター事務局長）

国際的に重要とされている「ウェットランド」とは日本語では「湿地」と訳されるが、湖沼から海岸まで含まれる実際は広い定義であり、数少ない貴重な場所である。

インドとパキスタンに広がるカッチ湿地のツルは、地元がベジタリアンだったため守られた。

共生には様々な形があり、立場の違いもある。

### 3 ディスカッション：実行委員会等による主な発言の要旨

（ナベヅル環境保護協会）

地元としては、ナベヅルの渡来数回復のため、田圃を餌場として如何に活用していくかが課題。有機栽培や山ねぐらの再生などにも取り組みたい。

（出水市長）

一方では絶滅の危機の中で成功又は、成功途上などあるが、出水市は渡来数が増え続けていく形。増えることの心配があり、分散化が課題だ。

（豊岡市長）

長江など海外にも行ったが、同じ自然環境なのにそこだけに鳥がいるのは、そこに鳥を愛する人がいるからだ。取組は信じ続ければきっと実を結ぶ。環境の志は、それだけではいつか萎むので経済に着目すべき。経済に裏打ちされることが必要で、環境を良くすることで経済が発展することを目指すべき。これは日本が世界に貢献できる分野である。環境と経済の両立は不可能ではない。環境を良くすることで生きていることが誇りにつながる。

（佐渡市長）

周南に来てみて、ここには人がいたと実感した。環境を守るためには、地域が立ち上がることが重要。佐渡には毎年何千人ものボランティアが来るので、補助金も出さずに田圃の整備ができる。トキ、コウノトリ、ナベヅルをシンボルに暮らしを変えていく必要がある。周南は環境とコンビナートが両立している。コンビナートからちょっと走ればナベヅルが居る。これからのロケーションはこうあるべき。

（環境省）

絶滅のおそれのある生きものは意外に人里の近くにいる。環境省でも、最初がトキ、次がツシマヤマネコ、そしてイリオモテヤマネコ、今はヤンバルクイナとの共生についてのモデル事業に取り組んでいる。トキは環境再生ビジョンを立ち上げてやってきた。環境省では国指定鳥獣保護区にビオトープを作る。あと 80ha のビオトープが必要だ。コウノトリは住民参加の調査、シンポジウム、指導者作りなどで支援している。地域の取組が重要であり、ビジョンを持った人がリーダーシップを取ることが重要である。

（文化庁）

文化庁として手伝いしてきたことが間違っていなかったと思った。鳥だけでなくいろいろな形でこうした場が続いて欲しい。文化財保護法でトキ、コウノトリなどは特別天然記念物指定になっており、国宝に当たるもの。

（農林水産省）

水田が餌場。田圃は人間だけのものではない。日本には 280 万 ha の水田があり、米は 190 万 ha で作っている。米消費が増えないといけない。生きものに優しい米作りのため、農薬を使わない農法、中干しを遅らせることなども重要である。

### 4 周南宣言

周南宣言（別添）が満場一致で採択され閉会した。